

追放された荷物持ちは実は転生者で色々な所から声をかけられる

北方守護

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはよくある設定の作品です。

目次

第1幕	1
第2幕＋設定。	4
第3幕	7
第4幕	10

第1幕

その世界の名はムンドナトウレーザと言った。

その世界の中に幾つかある大陸の一つの地域にある街の中の冒険者ギルドではある事が起こっていた。

ギルド内の酒場にあるテーブルの一つである冒険者パーティが話している時だった……

「なあ、タケアキ お前は今日でうちのパーティから追放だ」

「ん？まあ……最近そんな感じはしてたけどな……それでなんで？セサル」

金髪の青年でパーティでリーダーを務める「剣士 セサル」がパーティでは「荷物持ちのタケアキ」に追放を言ったが、聞いた方は何となく理解していた。

「ちよ、ちよつと待つて下さいセサルさん！なんでタケアキさんが追放なんですか!?!」

それを聞いていたピンク色のカールが掛かった長髪の少女「回復術師のキアラ」がセサルに詰め寄った。

「良いか？キアラ、俺達はもう少して冒険者ランクがAクリスに昇格出来るんだ……けどなタケアキは何もしてないじゃないか!」

「そんなタケアキさ「まあ、セサルの言う通りよね……それなりに助かってはいたけど」アナさん!?!」

セサルがキアラに説明していると「魔法使いのアナ」が話しに入ってきた。

「だって、今日の戦いだってタケアキがいなかったら、もつと早く終わってたんじゃない?」

「そ、それは……フリオさんはどうなんですか!?!」
「んあ？俺はなあ……別にどつちでも構わないけどなあ……」

キアラは「重戦士のフリオ」に意見を求めたが彼は賛成とも反対とも言えない意見を出して食事をしていた。

「じゃあ、俺を追放するが2名で反対は1名、フリオはどちらでも無いつて事か……分かったよ俺は、このパーティから抜けさせてもらう

よ　じやあコレがここの代金だ」

「あつ！待ってください!!タケアキさん!!」

タケアキが代金をテーブルに置いてギルドを出るとキアラが追いかけてきた。

「タケアキさん！本当にパーティから抜けちゃうんですか!？」

「ああ、そろそろ俺のレベルじゃ皆にも追いつかなくなってきてたし、ちようど良いタイミングだったのかもな」

「そんな……だったら！私も「それはダメだキアラ」けど……」

タケアキはキアラが何かを言おうとしたがそれを遮った。

「キアラは、このパーティに必要な存在だ……だから抜けようとするな」

「けど……けど……」

「ありがとうな俺の為に泣いてくれて……」

タケアキが泣き出したキアラを軽く抱きしめるとその胸の中で泣いていた。

暫くして……

「それでタケアキさん……パーティを抜けてどうするんですか？」

「ああ、それなりに冒険はしてきたから色々と世界を回ってみようと思っただ」

泣き止んだキアラを連れてタケアキは近くにあったベンチを座って夜空の月を見ていた。

「そうなんですか……もしかしたら、何処かで再会出来るかもしれないね」

「そうだな……ほら、そろそろ酒場に戻った方が良いぞ……」

「はい……タケアキさん……それじゃ……」

タケアキに促されたキアラは酒場に戻った。

一方、タケアキは月を見ていた。

「いつのまにかこんな異世界に来たと思ったら……色々あったな……」

実はタケアキはこことは違う世界で命を落とした転生者と呼ばれている存在だった。

「だけど、使える魔法がなあ……【ステータスオープン】」

タケアキが言うのと目の前にゲームなどで見るステータスが浮かび上がった。

そこには名前やHPやMPなど記されており、その下には……

タケアキ Lv10

職業【ジョブ荷物持ちポーター】

使用可能魔法 火魔法Lv1 水魔法Lv1 木魔法Lv1 土

魔法Lv1 風魔法Lv1 雷魔法Lv1 光魔法Lv1 闇魔法

Lv1

所持スキル

料理熟練度10 掃除熟練度10 裁縫熟練度10 鍼灸熟練度

10 揉師熟練度10

と記してあった。

「魔法もこの世界の人間なら誰でも使える程度で1つを除いて全属性は使えるけど……【ファイヤ火】」

タケアキが魔法を唱えたが指先にマッチ程の大きさが発生した程だった。

「この位だもんな……さてと宿屋に戻って街を出る準備でもするか……」

タケアキは腰を空けると宿屋に向かった。

第2幕十設定。

宿屋に戻ったタケアキは自分のスキルについて考えていた。

タケアキは元々この世界の人間ではなく元いた世界で命を落とした人間だった。

そして元の世界では主に料理人をしながら何でも屋をしていた。

それに祖父が医者をしており手伝う為に針灸師とマッサージ師の資格も取得した。

その代償という訳ではないが30代後半にも関わらず独身だった。

だがタケアキは小さい頃に両親が亡くなってから祖父母に育てられていたので寂しいとは思わなかった。

そして何でも屋をしていたある日、タケアキは工事現場の事故に巻き込まれて命を落とした……

「それで気が付いたら、コッチの世界に居たんだよな……赤ん坊だったのは驚いたけど……」

タケアキは自身の過去を軽く思い出して苦笑していた。

「だけど、この世界は普通に魔法が使えたりモンスターが居たんだよ……」

「そして、15歳になって神殿で【鑑定】を受けたら【荷物持ち】って言われて……皆に笑われて……」

「魔法も無属性の1つ以外は使えるけど全部Lv1で戦闘には役立たないんだよな……それとは逆にスキル熟練度が最高のLv10なんて……これが喧嘩をした事も無い普通の人間なんだろうなあ……そろそろ寝るか」

タケアキはベッドに横になると、そのまま眠りに着いた。

魔法とスキル熟練度とLvの数値、職業の関係。

魔法は火・水・木・土・風・雷・光・闇・無の9種類あるとされている。

Lvは1から10までありLv10の魔法を1種類でも使える者は2つ名が付けられる事がある。

例：火魔法のLv10の魔法使いだと豪炎や爆炎などその使用魔法に関する物が多い。

スキルはその人物の生活などに関係しており種類によってLv10はプロ級で王族や貴族などに仕えたり店を構えたりする。

だがタケアキの様に複数のスキル持ちは仲々いない。

朝になってタケアキは冒険者ギルドに来ていた。

「さてと、このギルドに来るのも当分ないだろうな……あつ、ルナさん」

タケアキはカウンターに行く顔見知り個人担当者でもある【狐の獣人 ルナ】に声をかけた。

「あつ、タケアキさんおはようございます、こんな朝早くからどうしました?」

「おはようさん、ああ、それはパーティーを抜ける事を報告しに来ただ」

「えっ!? タケアキさんがパーティーを抜けるって、どういう事ですか!?!」

「それはな……」

タケアキの言葉を聞いたルナは驚いていたので、そのまま事情などを説明した。

「そうでしたか……てつきりタケアキさんはあの人に何か言われたのかと思つてました」

「ああ、アイツか……まあ、何となく俺を下に見てたからな」

タケアキとルナが話してる人物とは、このギルドの職員の1人【人間 コウツ】と呼ばれてる者だった。

彼は現在いるギルドから上の位である皇国ギルドに行こうと考えている者だった。

幾つかの条件があるが、その中の1つに……

「確か……【自分が担当してる冒険者パーティーがSランクに昇格したら】って言うのがあったよな?」

「はいSランクのパーティーを見つけたから、先見の明があると言う

事でって私は聞いてます」

「まあ、アイツからすりや俺は何の意味の無い平民だからな……さてとアイツが来る前に行きますか それじゃルナさんまた」

「はい、また、この街【キパート】に来る事があつたらギルドにも顔を出してください」

タケアキはルナと話を終えるとキパートの街を出て行った。

第3幕

キパートの街を出たタケアキは他の街に向かう十字路にいた。

「さてと……どつちに行こうかねえ……確かギルドの情報板に南の【オリクトの街】は鉾山に怪物モンスターが出るって書いてあったし……西の皇国【ランプスイ】は第4皇女が行方不明だって言うし……うん久し振りに東の【カナール】に行つて海産物でも食べに行くか……」

タケアキは東に足を向けた。

暫く歩いていると……

「へへへ、兄ちゃんここを通りたかつたら有り金と荷物を全部置いていきな」

タケアキは数人の山賊に囲まれていた。

「うーん……まさか山賊がいるとはなあ……そうは言っても渡した所で無事に帰すとは思えないけどな」

「そこまで分かつてるならブチ殺してやるよ!」

山賊の1人がタケアキに剣を振り下ろした時だった……

「ふう……(魔纏まとい・雷かみなり)」

「なっ!?ガハッ!!」

タケアキの両足に雷が纏われておりそのまま山賊が蹴り飛ばされた。

「なんだ! テメエは!! ゲボツ!!」

「まあ、殺しはしないから大人しくしてくれ」

タケアキは猛スピードで山賊達の相手をした、その結果……

「ふう、こんな所か……」

「テ、テメエ……何者だ?……」

「ん?俺は……ただの荷物持ちだよ……黙って寝とけ」

タケアキは縛り上げながらも意識があつた山賊の1人の顔を蹴り飛ばして気絶させた。

「さてと……うーんと、コイツらは……「誰か……いるんですか?……」ん?」

タケアキが何かを考えてると声がしたので、その方向に向かった。

タケアキが向かった方に行くとは荷馬車があつたが扉に鍵がかけられていた。

「おーい、中に誰かいるのか?」

「もしかして……山賊達の仲間ですか?」

「いや、俺は只の通りすがりでな、その途中で盗賊達に会つたんだまあせいづらは始末したけど」

「えっ!? そうなのですか……すみませんが私の事を助けてくれませんか?……お礼は必ずしますので……」

「それは良いんだけど……言つちや悪いがアンタが盗賊達の仲間だつて事も捨てられないから 拘束されてるなら、そのままでも良いなら……」

(それは……分かりました、それで構いません……なので私をここから出して下さい……)

「ああ分かった、出来るだけ扉から離れてろ……んーとあつたあつた」
誰かに指示を出したタケアキは荷物袋の中から粘土の様な物を扉の鍵の所に塗り付けると、それに伸ばしたワラを付けた。

「よし、これで準備は出来たか、おーいこれから大きな音がするから耳を塞いどけよー」

(え? あの耳を塞いどけと言われても私は両手が……)

「せーのスイッチオンドオン!……「キヤア!」……ちよつと多かつたかな?」

タケアキがワラに火を付けると、そのまま伝つていき粘土に到着すると同時にそのまま爆発し扉を破壊した。

「まあ開いたから良いか……おーい大丈夫か?……つて」

「うーん……耳がキーンと……してます」

タケアキが誰かと確認するとクルクルとロール掛かつた長めの金髪でちよつと上質の白いドレスを着た女性が目を回しておりタケアキは、その人物に見覚えがあつた。

「何となく聞いた事がある声だと思つたら……アンタだったのか皇国第4王女フリージア……いや、この場合はリーザって呼んだ方が良いか?」

「ふえ？私の事をそう呼ぶのは……タケ……アキ？……」
名前とアダ名を呼ばれたリーザは正気に戻ると助けにくれた人物
に見覚えがあつた。

第4幕

盗賊達からリーザを助けたタケアキは事情を聞きながら焼いた魔物の肉を食べていた。

「ほら、そこら辺を歩いていたオーク豚に似た魔物の肉だけだよ」

「ありがとうございます……美味しい！」

「まあ、王宮の食事からすれば簡単な物だけだな……それでリーザ、何があつたんだ？」

「はい……実は……」

第4王女フリージアは何があつたか事情をタケアキに話し始めた。

その内容とは現皇帝でフリージアの父親であるルドルフの体調が悪くなり新たな後継者を決める事となった。

・現皇帝ルドルフにはフリージアの他に3人の娘と3人の息子がおり現段階では第1王子の【ウイクトル】が最有力候補だった。

・だが第2王子の【デロタ】がウイクトルとルドルフの命を狙っている事をフリージアが知ってしまった。

・それを他の後継者達にバラされては困るデロタは盗賊達と裏取引をしてフリージアを誘拐させたとの事だった。

「なるほど……それでリーザを始末なり何処かに売り払おうとした所を俺が見つけた訳か……」

「はい……ですが、タケアキがいてくれて助かりました　ところで何故この様場所に居たのですか？」

リーザの質問にタケアキは理由を説明した。

「まあ、そのお陰でリーザを助けたんだけどな……それで、これからどうするんだ？このまま皇国に戻っても同じ様な事が起こる可能性があるがあるぞ……」

「そうですね……あのタケアキが良いなら一緒に旅をしても構いませんか？」

「うーん、俺は構わないけど……リーザからするとキツイかもしれないねえぞ、それでも良いのか？」

「はい、これでも私は小さい頃は山々を歩いていました、それに魔物が

出たとしてもタケアキが居るから大丈夫ですよね?」

「アアー……そういやリーザは俺のギフトを知ってたんだったな」

タケアキは観念した様な表情で頭をかいていた。

この世界では数少ないが職業を表す【ジョブ】とも経験から会得する【スキル】とも違う神からの贈り物通称【ギフト】と呼ばれている特殊技を持つている人物がいるがタケアキは、そのギフトを持っている者の1人だった。

「けど、俺自身がギフトを持ってるなんて気づいてなかったんだけどな、たまたまリーザが知ってたんだったな」

「はい……私も数少ないギフトの持ち主ですから」

リーザの両目は青色だったが右目を閉じて開けると金色で十字の瞳孔に変化していた。

「久しぶりに見たな、リーザのギフト【神龍眼】」

「ええ、その者が気付いていないスキル等を探す事が出来るギフトですな」

リーザが瞼を閉じて開くと元の目に戻っていた。

「俺以外に、それを知っているのは……ルドルフのおやつさんとリーザの母親だけだったな」

「はい、お父様やお母様からは周りの者達に知られてはならないと言われまして……」

「まあ、2人の言うことも分かるけどな……ふう、ご馳走さん」

「ご馳走さまでした、それでタケアキはこれからどちらへ行くのですか?」

「ああ、久しぶりに海産物が食いたくなかったからカナーレに行こうとしてたんだ」

「カナーレですか……良いですね」

「けど、旅に出る前にコイツらを近くの街まで連れて行かないとな」

タケアキが拘束した盗賊達を指すとリーザも了承したので馬車を応急処置をすると、そのまま近くの街に向かった。